

## 1. はじめに

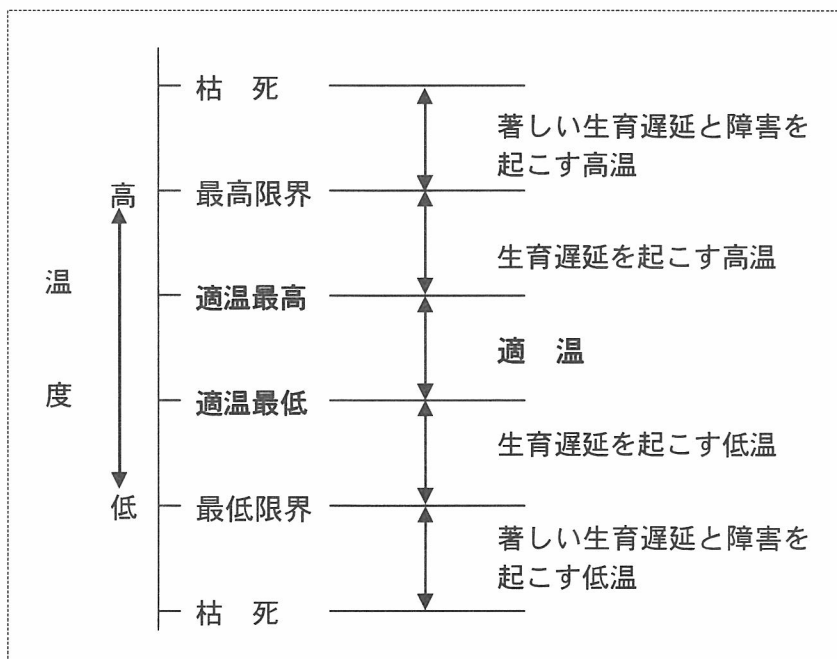
原油価格が高騰する中、施設園芸における生産コストへの影響が心配されると同時に、農家組合員が過度に節油することにより生育適温を確保できず収量・品質が低下することが危惧される。

このため、JA全農は「JAグループハウス適温管理運動」を提起し、施設園芸作物の温度管理を再度確認するとともに、省エネによる適温管理下での生育、収量、品質の維持を目的に運動を展開している。

オイルショック時代には、省エネに関する研究が数多く行われたが、原油価格の低下とともに注目されなくなった。本冊子は、当時得られた知見に新たな情報を加味し、①施設園芸作物における管理適温の確認、②適温管理を前提とした「省エネ対策」の2つの視点で、生産現場で役立てることをめざして編集した。また、点検チェックシートを掲載し、生産現場で直接活用できるよう工夫した。

本冊子で使用している「適温」とは、最も良好な状態で作物が生育する適温最高～適温最低の温度域で、管理温度の言葉の定義は下図を参照としていただきたい。

なお、本冊子の作物別の温度表示については、品種・地域間差があることから、詳細については各都道府県の農業試験場、普及センター等に相談することをすすめる。



第一次・第二次オイルショック時の施設生産をとりまく時代背景（現在との違い）

- (1) 外国からの輸入がほとんどなかった
- (2) 地価が常に上昇していたため土地の担保価値が高く、借り入れが容易であった
- (3) 省エネ対策に対する国および地方自治体の手厚い補助、融資体制があった
- (4) 物価や労働賃金に対して、生産物の値段が現在よりもかなり高かった（品質が良ければ現在と変わらない値段の品目もあった）

- ・現在のほうが状況としては厳しい
- ・ただし、地域によっては冬季の気温が当時より上がっており、使用する重油の量自体は減っている！？

オイルショック時に生産者が実施した主な対応策、研究機関での主な研究テーマ

- ア. 温湯暖房から温風暖房へ（定着）
- イ. ハウスの外張り、内部カーテン（定着）
- ウ. 夜間シルバーシートによる全室カバー
- エ. 温室の屋根上、カーテン上、側方への地下水のかけ流し、または散布
- オ. 変温管理、低温管理
- カ. 耐低温性品種の導入
- キ. 地中熱交換方式の導入
- ク. 古タイヤ燃焼ボイラーの導入

現在でも応用できる技術・栽培管理法あり

過去に学ぶ！！